

# 日本人は宗教的な部分を 自覚していないだけ

## 生活の中にある 日本人の宗教心

「あなたの宗教は？」と聞かれると日本人は「無宗教」と答える人が多いようです。この場合の「無宗教」の意味は、特定の宗教宗派に属し、熱心に活動しているわけではない。あるいは、家の宗教の教義をよく知っているわけでも、その教えにのっとって生活しているわけでもない。という意味だと思われま

す。しかし、日本人が本当に「無宗教」というと、これは疑問です。キリ

スト教や新宗教などに入信していないと、宗教に関わっていることにはならないと考える傾向があるようですが、「宗教心」の大切さは多くの人が認めていますし、宗教を知った上で否定する無神論とは違います。

これは、単に宗教的な部分を自覚していないだけだということもできます。子供の頃の生活を思い出してみましよう。日本人は、通過儀礼を一つ一つ経て成人となり、社会の一員として認められています。特定の神仏にこだわらずに手を合わせる気持ち、これも一つの「信仰」形態で

あり、日本人の「宗教」なのです。現代になっても、自然崇拜の感覚や、年中行事、祭りを楽しむ国民性を持つています。

また、「水に流す」「お陰さまで」などの日本語のなかには、日本的宗教観が表れています。水難事故の際に、遺骨の引き揚げにこだわるのも、そのままでは故人が成仏できないという宗教的な感情が根底にあるからです。

しかし「宗教団体」とはできることなら関わりたくない。「宗教」が必要なのは精神的に弱い人間だけで、

年齢を重ねてからでも十分間に合うし、困ったときの神頼みでよい。そんなことをいう人もいます。一連のカルト宗教の事件が、宗教への警戒観をいっそう強くさせました。

### 宗教を知ることとは 国際交流にも役立つ

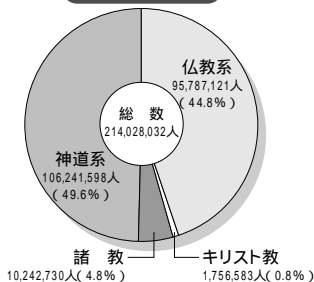
日本人には、肉親の死が訪れる年齢になるまでは、宗教的な思考を無意識に避けていたり、宗教的なことを嫌だと思つて目をそらす傾向もあります。一方で、宗教的に自己を抑制したところがある人は、むしろ人間的な魅力に欠けると判断するおかしな風潮もあります。また、占いや靈魂の存在は信じて、神や仏の存在や、神仏と自分との関係までは考えない人が多いようです。

宗教に関しては、日本の常識は世

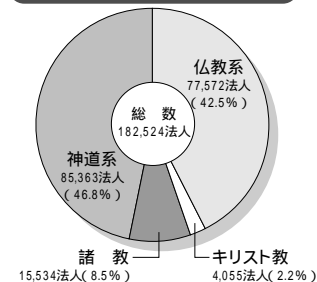
界の非常識と考えていいでしょう。別に外国に合わせることもありませんが、日本と外国との関係・外国人との関係を考える上で、日本人の感覚は通用しません。なぜかというところ、無宗教とは、「倫理観のない、誰にも見られていなければ何をしてもいいと思う、善悪の基準を持たない人」と判断されてしまうからです。宗教を知り、日本人としての宗教観を自覚し、海外の宗教にまつわる価値観や感覚を知ることは国際交流にも役立つでしょう。

## 宗教法人・信者数

日本の信者数



日本の社寺教会等単位宗教法人数



『宗教年鑑(平成12年版)』(文化庁編、ぎょうせい)より

重複しているため、信者数の合計は、日本の人口を大きく上まわる

## どこまでが神道で、どこまでが仏教か

## 八百万の神を祀る神道

インド・中国・朝鮮半島を経て日本に伝来した、釈尊しやくそんの開いた外国産の仏教。日本人の古くからの信仰を元にする神道。この二つの宗教は、日本人にとって空気のような存在です。「寺社」と並び称されて、その区別はさほど意味を持っていないようです。

では、日本人の宗教観のもとになる「神道」とはどのような宗教なのでしょう。神道は、仏教の釈尊やキリスト教のイエスのような開祖のいない、日本の民族宗教です。アニミズムや自然崇拜、呪術などの原始的信仰や、農耕儀礼などの祭りを行い、祖先神、氏神などを祀まつってきました。5世紀末から6世紀にかけて、大和朝廷による統一国家がつくられると、さまざまな系統の神話が整えられ、現在は『古事記』『日本書紀』

日本人にとって、民族宗教である神道と外来宗教である仏教の区別はなかなかつかない。神道と仏教の違いはどこにあるのか。

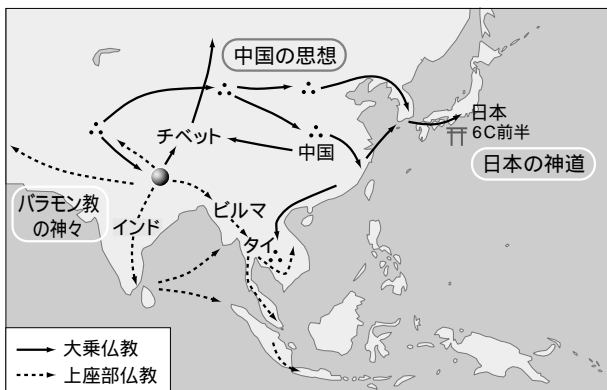
に伝えられています。そこでは、天の高天原たかまがはらの女神「天照大神あまてらすあのみかみ」の子孫である「天皇」が国を治める主権者とされ、神道では最高の祭司です。このことが明治の国家神道の形成につながっていきます。

神道の特徴として、「罪穢けがれ」の観念があります。これを払い落とすのが「褌はらい」、洗い流すのが「禊みそぎ」です。完全に清めるためには「忌いひ」という禁忌を守る生活を一定期間過ごします。

## 天皇家も仏教式の葬式を行っていた

それに対して、仏教には「穢けがれ」という考えはありません。渡来人の間で信仰されていたと思われる仏教は、538年欽明天皇の時代に百濟の聖明王から伝えられ、国づくりの支柱として利用されました。最新の海外の文化として、また、疫病、災害の除去、魂を鎮

## 仏教の広がり



インド生まれの仏教は、各民族の信仰を取り入れながら広まっていった

める力として、それまでの宗教観（神道）を補充する形で仏教が取り入れられたといえます。

日本では長く、神仏習合（神道と仏教の混淆思想）の時代が続きました。江戸時代まで、天皇は仏教による葬儀を伝統的に続け、埋葬されてきました。天皇家は代々仏教徒であったといえます。しかし、明治政府の国家神道政策、神仏分離令によって状況は一変し、寺院と神社は分けられ、多くの寺院が破却され、僧侶が強制的に還俗けんぞくさせられました。

日本人の宗教心にとって、仏教と神道はいまだに分けられないことが多いようです。現在でも寺院の敷地の中に鳥居があったり、寺院と神社が隣接していることがあります。仏式の葬儀の場合、飲酒を禁じているはずなのに、火葬している間、お清めとって酒を飲んだり、葬儀から帰ると塩で清めたりします。また、神社では神道式に柏手を打って、礼をするのではなく合掌している光景も目にします。宗教組織は分離しても、日本人の感覚として神仏がともにある宗教心は今も生きています。

## 祖先を崇拜するのは本来、儒教の教えだった

### 立身出世のため勤勉だった孔子

古代の日本に伝わった儒教（儒学）は、宗教ではないという議論もありますが、天を敬い、祖先を崇拜する、孔子に始まり孟子へと受け継がれた中国の教えです。現代でも東アジア地域に影響力を持っています。

中世になると、儒教の一派である朱子学が輸入されました。朱子学は、朱熹（朱子）が南宋で儒学を大成したものです。

孔子（孔丘）はBC551年、中国の春秋時代、魯国の農村に生まれました。身分はさほど高くなく、父は3歳の時に亡くなり、父方の家で育ちました。19歳で結婚し、地方役人を務めながら勉学に励みます。次第にその学識が評判となり、役人を辞めて私塾を開き、弟子を育てました。官職には恵まれず、52歳になって

仏教とともに日本人の宗教心を形成している儒教。葬式や先祖崇拜など、日本の仏教に儒教の思想が大きく影響している。

魯国に仕え権力を握りましたが、後に失脚し、長く弟子とともに放浪した末、故郷に帰り儒学の教えをまとめました。

孔子の人生は立身出世を望むが叶わず、勉学に励み弟子を教育する人生でした。釈尊とほぼ同時代の人物ですが、釈尊が世間の栄達に興味を見いださず、出家して真理を求めたのとは対照的な人生を送っています。

### 儒学は体制維持に利用された

孔子の思想の中心は「仁」であり、他者への思いやりの心を表します。「礼」は「仁」を元とする規範で、「礼」によつて「仁」が実現されると説きます。

具体的には、国家や家族を語り、社会秩序、年功序列を重んずる現世の処世術的な教えとなり、「忠」「孝」などの教えや朱子学の「大義名分論」は、江戸幕府の

## 儒教の基本典籍「四書五経」

### 五経

儒教は前漢の武帝(BC156-BC87)の時代に国教化され、基本典籍(五経)が定められた

#### えききよう 易経

倫理と宇宙論を説き、占い書としても注目される

#### しよきよう 書経

古代の王による言葉や行いを伝える

#### しきよう 詩経

中国最古の詩集

#### らいき 礼記

礼の解説や意義などを説いた書

#### 春秋

春秋時代(BC.770-BC.403)の魯国の歴史を記す

### 四書

朱子が定めた基本書。孔子と弟子の学問を伝える

#### 大学

『礼記』の中の一編。曾参(孔子の弟子、BC.505-BC.435?)の著とされる

#### 中庸

『礼記』の中の一編。子思(孔子の弟子、BC.492-BC.431?)の著とされる

#### 論語

孔子と弟子たちの言行録

#### 孟子

孔子の思想を継承した孟子(BC.372-BC.289)と弟子たちの言行録

体制維持に利用されました。朱子学は幕府公認の学問(正学)となり、湯島聖堂には現在も孔子廟が祀られています。明治政府でも「教育勅語」に見られる倫理徳目として国家権力の維持に利用されました。

仏教では、年齢にかかわらず出家してからの年数と修行段階で人を判断する一種の実力主義(法臘ホウラクといふ)ですが、儒教では、年齢とそれぞれの社会的役割を強調します。目上の者を敬うなどの日本の美徳は、儒教を元にしたものが多いのです。

例えば、位牌は、儒教における祖先崇拜から中国仏教に取り入れられたもので、インドで生まれた仏教には葬儀も祖先崇拜もありません。また、遺骨に対する執着もありません。

「温故知新(故きを温ねて新しきを知る)」「朋あり、遠方より来たる、亦樂しからずや」などの諺は、『論語』に収められている孔子の言葉です。

しかし、日本では儒教の教えや制度を完全に取り入れませんでした。そのため、近代化の妨げになることもありませんでした。

## 時代によって変化する 仏教の役割

### 鎮護国家に仏教は利用された

日本における仏教は、渡来人の間で信仰されていたようですが、538年、百済の聖明王から欽明天皇に金銅の仏像と経典が贈られたのが公式の伝来とされています。崇仏派の蘇我氏と排仏派の物部氏との争いなどを経て、仏教は受け入れられました。

594年、推古天皇の「仏法興隆の詔」により、各豪族が寺院を建立しはじめました。604年には摂政の聖徳太子が憲法十七条で「篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり」と制定し、仏教を国家政策の根幹に取り入れます。

奈良時代になると、聖武天皇が「国分寺建立の詔」「盧遮那仏造立の詔」を発し、国づくりに仏教を利用。当時の不安定な政治状況や疫病の流行を鎮めるため、

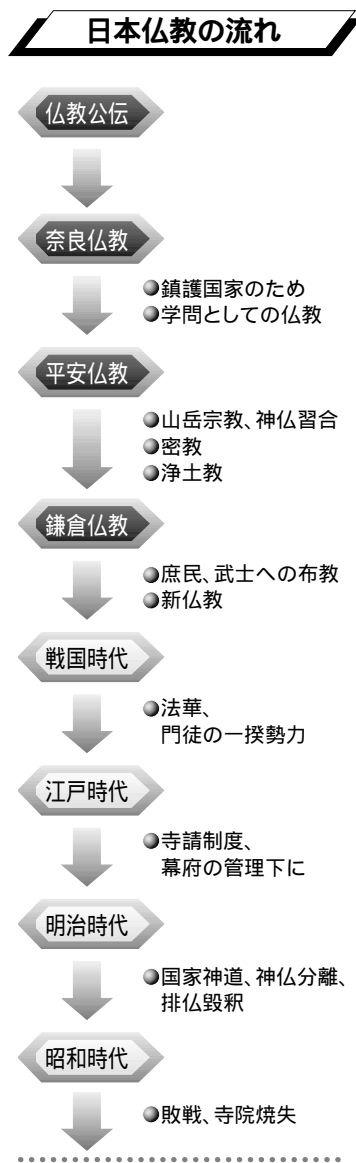
日本に伝わってから、さまざまなかたちで、日本社会と関わってきた仏教。仏教の伝来から現在の課題まで、日本仏教史を俯瞰してみる

鎮護国家の仏教として、奈良に東大寺、各国ごとに国分寺・国分尼寺が建立されました。

その後、興福寺など大寺院の政治力が大きくなったため、恒武天皇は平安京遷都（794年）の折に、奈良仏教勢力と決別します。最澄・空海が唐から持ち帰った新しい仏教を保護して、旧仏教勢力に対抗させました。特に密教は奈良仏教に代わって、鎮護国家や朝廷貴族のための加持祈禱を担いました。

### 檀家制度で葬式仏教に

飢饉に苦しむ都の惨状を見聞きし、僧兵さえ跋扈する墮落した比叡山の状態に失望した法然らが、庶民の救いを掲げ、大乘仏教本来の目的である衆生済度のために新しい宗派を立てました。鎌倉仏教の新宗派によって、それまで仏教の対象外と思われていた身分の



低い者、女性などにも仏教の救いが開かれ、人々は新しい仏教の教えに救いを求めました。

戦国時代には、一向一揆、法華一揆など、宗教的共同体としての意識も高まり、組織化された一大勢力として、戦国大名と戦い、信仰を守ろうとする集団もありました。

江戸時代になると、寺請制度によって、キリシタン禁制の一翼を担い、幕府の出先機関となって檀家制度に支えられ、布教を禁じられました。一般にも「祖先信仰」を仏教寺院が担うようになり、「葬式仏教」と

非難される現在の原型ができました。

さらに、明治時代の神仏分離政策による排仏毀釈の打撃を受け、僧侶も俗人と同じように苗字を名乗り、妻帯、服装を自由にするなどの規定が改められ、寺院の世襲化の芽がここから始まりました。そして、第二次大戦時の米軍の本土爆撃では、京都・奈良などを除いて、都市では多くの寺院が灰燼（かいじん）に帰りました。戦後、伽藍（がらん）（寺院）の復興などに多くの力が注がれましたが、都市化や西洋化にともなう生活の変化への対応が課題となっています。



## 日本人は今、 仏教に何を求めているのか

### 現代人はヒールリングを求めている

宗教離れは先進国全体の傾向ですが、仏教各宗派の本山では、企業や学校の体験学習が多く行われています。霊場を巡礼する人も多く、仏教関連の美術展は混雑します。宗教的なものを現代の日本人も求めていることは確かでしょう。

また、心霊現象や占いに興味を示し、安易に超能力や教祖の指導を信じて、カルト宗教に入る若者も少なくありません。特にオウム真理教（現アレフ）の一連の事件では、高学歴の若者が入信して大量殺人を犯し、世間に衝撃を与えました。これは、教育の現場から宗教が極力排除され、宗教的な思考に免疫力のない、騙されやすい日本人を育ててきた結果といえます。

最近の癒しブームは、人々の関心が心の問題に向か

癒しブームや仏教関連美術への注目など、日本人にとって、仏教が実は身近な存在であることが、最近見直されつつある。

いつつある傾向がもしません。震災・犯罪・倒産やリストラなど、今までの価値観が崩されるような時代に、心はどこに向かうのでしょうか。

物質第一の消費社会には限界があるとわかりつつも、スティックな生活など考えられないほど、私たちは便利な生活に慣れていきます。ですから、日常の中の書物音楽、巡礼旅行などに、少しずつ宗教的ヒールリングの力を求めています。また、停年後、出家したいと考えるサラリーマンが増えており、実際に大企業の社長が引退後、仏門に入ったことが話題になりました。

### 現実離れせず

### 現代の生活に根ざした仏教を

国際社会との交流が本格的になるにつれ、相互の理解が大きな課題になっています。相手を理解すると同時に、文化的な背景の違う相手に理解できるように自

## 現代日本の宗教状況

- ヒーリング・グッズ
- お守り
- テレビや雑誌の占い
- 心霊現象
- 超自然現象への興味

仏教など  
既成宗教への無関心

カルト教団の布教

キリスト教・西洋文明への  
コンプレックス・あこがれ  
↓  
外見(行事)のみ取り入れる

国のことを表現しなければなりません。宗教の知識がなければ、政治経済や語学、そして文学、音楽、絵画、建築などの芸術も理解し合えないことに、日本人は少しずつ気づきはじめたようです。

宗教の必要性が増して、宗教施設としての寺院を人々が必要とするならば、人口の集中が進む都市に、礼拝・説法の場として、新しい寺院ができそうなものですが、新興住宅地にキリスト教の教会ができる一方で、新しい仏教寺院はあまり見かけません。あるいは、宗教問題や心の問題に対し、仏教界から積極的な発言がないと対応の鈍さを批判されています。

しかし、日本の仏教の現状はどうかといえ、現在は仏教界も世襲が進み、2世、3世の時代です。小僧時代から修行に励んだ、明治生まれの僧侶から世代交代が進み、「お坊っちゃま」教団になりつつあります。そんな中で、本来の仏教のダイナミズムを取り戻すことができるでしょうか。多様な価値観に対応していくことが社会的に望まれています。各宗派の動きは一般の人々には伝わってきません。